

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」に
ついての海外における諸研究（13）

—1970年代（その2）—

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3、第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第6巻第1、第2、第3、第4号および第7巻第2号において1960年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、なし、そしてそれについて、本誌第9巻第1号では、1970年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みの一部として A. S. スキナー (A.S. Skinner) の一労作のなかで示されている「アダム・スミスの価値尺度論」に関係するスキナーの所論の内容を整理する試みをなした。

本稿は、それにひきつづき、1970年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた個々の研究の内容を整理する試みの一部として、1970年代に出版された C. ナポレオーニ (C. Napoleoni) および H. W. スピーゲル (H. W. Spiegel) の各々の一著書のなかで示されている「ア

ダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつナポレオーニおよびスピーゲルの各々の所論の内容を整理しようとするものである*。

(1) C.ナポレオーニ(1970)⁽¹⁾

ナポレオーニは、つぎのような見方を示している。

① スミスは、『国富論』第1篇第5章の冒頭において、支配される労働 (labour commanded) が交換価値の真の尺度であるとしている。支配される労働というものそれ自体は、あきらかに、交換価値に、つまり、労働の価値すなわち賃金率に、依存する。したがって、支配される労働は財貨の一つの価値尺度としてはなんの困難性をも引き起こさないとしても、したがってまた、一つの計算単位として賃金率を用いることにはなんの難点もないとしても、循環論なしには、支配される労働が交換価値を決定する要因であると考えすることはできないのである。スミスがこの問題に気づいていたということは、彼自身がそれでは支配される労働はどのようにして決定されるのかということを問うたという事実によって、はっきりと、示されている⁽²⁾。

② なお、その「支配される労働」がどのようにして決定されるのかという問題にたいするスミスの議論は不首尾なものであったのであり、その意味では彼の価値理論は不首尾なものであった⁽³⁾のであるが、ある意味では、スミスの価値理論は、経済思想史上における一つのきわめて重大な段階を構成するものであった。そして、その意義を認識するためには、支配される労働という規準を交換価値の決定のコンテキストにおけるよりもむしろ(スミス自身が示唆した方向に沿って)資本主義的成長についての理論というコンテキストのなかで考えることが必要であったのであり、その支配される労働という規準は、成長それ自体の認定および測定のための一つ

* 諸研究の発表年度の区分は、本稿にさきだつ諸稿におけるのと同様、著書の場合には、その原版もしくは初版が出版された年度に、あるいはその最初の著作権が成立した年度に、したがった。ただし、本稿で使用した文献そのものは、必ずしも原版、初版のものではない。

の規準として使用されるものと考えられるものでもあったのである。⁽⁴⁾

③ なお、スミスの場合に、支配される労働という彼の概念が、どのような意味で、経済成長の問題にとって重要なものとなるのか、ということ、は、つぎのように示すことができる。すなわち、支配される労働は、交換価値を決定する要因とは考えられえないけれども、そのような価値を測定するためには完全に良好に使用されるのであり、またとくに、価値のうちの剰余に当たる部分を測定するものとして使用されることができるのである。そして、スミスの場合、支配される労働は、それがひとつの尺度として使用されるとき、つぎのような形で経済成長の問題とかかわりをもつのである。つまり、④スミスによれば、労働が、その生存手段に加えてある価値（利潤および地代の形で占有される剰余）を生産するときには、その労働は生産的労働であるのであった。したがって、支配される労働が体化された労働よりも大きくなるといった純生産物のもととなるものは、労働生産性である、ということが出来る。それゆえ、支配される労働は、体化された労働との比較で、たんに一財貨の価値についての一つの尺度を提供するだけのものではなくてその当該財貨が雇用の増加をつうじて一般的な生産物の増加にたいしてなしうるかもしれない貢献というものを測定する、といわれることも可能であるのである。⑤さて、たとえ支配される労働が体化された労働よりも大きかったとしても、必ずしもそのことによつて稼働させられることになる付加的な労働もまた生産的労働であるというわけではない。そのためには、資本家や地主によつて受け取られる「収入」が資本に転換される——あるいは、スミスの表現を用いるとすれば、蓄積される——ということが、必要なのであり、しかも、スミスの場合、その資本の蓄積ということは付加的な生産的労働者への賃金支払いということをつうじて、現れるのであったのである。⁽⁵⁾⑥ところで、スミスが総蓄積を生産的労働の賃金に還元しているという事実は、彼が成長を考察した道すじをきわだたせるのに役立つのであり、「価値」という用語が、スミスが彼の著書のこの部分でほとんどいつもそうしているように、全社会的

産出高を指し示すために用いられているときには、とくにそうである。すなわち、スミスは、社会的産出高とその産出高が支配しうる労働量との間の関係を、一つの交換関係として考えていた、と言うことができるのであり、そして、経済の達成 (performance) についての一つの規準としてのこの交換関係の重要性ということのゆえにスミスはたしかに、この交換関係に、さまざまな財貨の間の個々の交換比率ということに関連する交換関係にたいするよりもはるかに大きな意義を、付していたのである。かくして、もし社会的産出高が生産的労働の成果であり、そして、もし純生産物すなわち剰余が資本形成に支出されるならば、そのときには、社会的産出高と体化された労働との間の数量的関係は、その経済システムにもたらされる潜在的な付加的労働の量を測ることになるのであり、また、そのようなものとして、経済プロセスの成功 (success) の一つの尺度ということになるのである。⁽⁶⁾

④ なお、[スミスの議論においては、社会的産出高にはそれに対応する支配される労働が対置され、その支配される労働と体化された労働との差が、その社会の剰余に対応するとともにその経済システムに新たにもたらされる潜在的な付加的労働の量を示し、そしてもしその剰余が資本として蓄積され使用されるときにはそれは現実の付加的な生産的労働者への賃金支払いとして現れ、そして生産的労働の量の増大は社会的産出高のいっそうの増大をもたらすということになるのであるが、] スミスが経済プロセスの成功の程度そのものを考えるさいには、彼はそれを、少なくとも二つの異なる道すじで考えている。その一つは、資本蓄積の増進による賃金率の上昇、労働者の生活水準の向上ということであり、そしてもう一つは、資本蓄積の増進による雇用の増大ということである。⁽⁷⁾

⑤ また、以上のようなスミスの分析の意義を正しく理解するためには、その分析がかかわっていた歴史的背景を、すなわち、資本主義的蓄積プロセスが重要な役割を演じた封建的な経済から資本主義的／ブルジョア的な経済への変化といったスミスの時代の社会という歴史的な背景を、考慮に

入れなければならない。⁽⁸⁾

(注)

- (1) ここでは, Claudio Napoleoni, *Smith Ricardo Marx*, trans. J. M. A. Gee (Oxford: Basil Blackwell, 1975) のなかで示されているナポレオーニの所論をみる。なお, 本稿で使用した上掲書は, Claudio Napoleoni, *Smith Ricardo Marx: Considerazioni sulla storia del pensiero economico*, seconda edizione parzialmente rifatta (Torino: Boringhieri, 1973; prima edizione, 1970) からの英語訳版であるが, ナポレオーニの研究の発表年度の区分については原本初版の出版された年度, 1970年を記しておいた。そして, 以下では, 上掲英語訳版を, Napoleoni [1970] と略記することとする。
- (2) Napoleoni [1970], pp. 39-40. なお, ナポレオーニは, 「支配される労働」の決定という問題に対するスミスの解答は二つの部分に分かれるとしつつその解答をつぎのようなものとして示している。すなわち, 「労働の全生産物が労働者に属する」^{ストック}「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」というスミスによって仮定された原始的状況のもとにおいては, 体化された労働 (labour embodied) というものをある所与の財貨の生産にどうしても用いられなければならないかつた労働を意味するものとすれば, 支配される労働の量は, 体化された労働の量に等しい。他方そのような段階から, 財貨の価値が, 賃金からだけでなく, 資本の蓄積ということをつうじて生起することになる利潤および土地の私的所有ということに起因する地代からも, なるといった段階へと移ると, そこでは, 財貨が支配することのできる労働の量は, 体化された労働の価値および利潤と地代との価値 (すなわち, 剰余の価値)^{マーズ}とに対応することとなる。原始的な段階を離れると, 支配される労働は体化された労働に等しいと言ふことができなくなるのである。そして, スミスの議論によれば, 財貨の価格は「究極的には」賃金, 利潤および地代に「分かれる」のであり, また, 「ここで注意しなければならないのは, 価格のすべての異なる構成部分の真実価値は, そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によってはかられる, ということである」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited...by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library (New York: Random House, 1937)——以下, *W. N.* と略記する——, p. 50. 大河内一男監訳『国富論』〈全3巻〉, 中央公論社, 1976年——以下, 大河内訳と略記する, ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——(I), 85ページ。)から, その財貨によって支配される労働の量は, 賃金, 利潤および地代

の水準によって決定されるということになり、さらにまた、競争プロセスが賃金、利潤および地代のある所与の「通常率あるいは平均率」——スミスが「自然」率とよび、また、一時的な市場の変動をこえて組織的にいきわたる傾向のある率——をもたらすのであるから、均衡においてある財貨が支配できる労働の量は、その財貨の「自然価格」によって、すなわち、その財貨をつくるのに使用される諸生産要素にたいして賃金、利潤および地代の自然率が支払われるときに成立する価格によって、決定される、ということになる。Napoleoni [1970], pp. 40-41.

そしてナポレオーニは、スミスの議論をこのようなものとしてとらえたうえで、つぎのような論評をくわえている。すなわち、スミスの議論がこのようなものであるとすると、支配される労働を構成する諸要因というこの考えに関してある問題に出くわすこととなる。すなわち、賃金の自然率、利潤の自然率および地代の自然率は、それら自体が価値なのであり、したがってまた、こんどは、それらの自然率がどのようにして決定されるのかということをつきとめることが必要になるのである。したがって、スミスは、その諸要因それら自体は価値には依存しないという必要な、正式な要件を満足させる価値理論を提供することには、成功しなかったのである。それゆえ、この意味においては、スミスの価値理論が不首尾なものであるということには、なんの疑いもありえない。すなわち、相対価値の決定の問題——その問題の解明は、剰余すなわち純生産物の価値を定めることができるか否かということにかかっている——は、未解決のままなのである。Napoleoni [1970], p. 41.

また、ナポレオーニはさらに、スミスが彼の交換理論のなかで取り扱った理論的に大きな重要性をもつ問題として、つぎの二点を取りあげ、その各々について説明をくわえている。それによれば、第一の問題は、利潤と地代の本質にかかわるものである。スミスは、地代と利潤の双方を、労働の生産物からの「控除分」として定義している（*W. N.*, p. 65. 大河内訳〔I〕, 111-112ページ。）。地主による土地所有のゆえに、また、資本家による生産期間のあいだの労働の維持のための資本の前払いのゆえに、地主と資本家はそのような控除を実行することができるのである。この定義は、剰余は剰余労働——労働者たちの生存に必要な労働の量をこえた労働者たちによって行使される労働量——の成果であるというマルクスによって十分に展開されることとなった理論を先取りするものである。そして、剰余についてのこの考えは、体化された労働が交換価値の決定要因であるという原理を資本主義社会にも一般的に適用できるものにするに——リカードとマルクスによって試みられた一般化、しかし、スミスが可能だとは考えなかった一般化——、根本的なものなのである。つぎに、第二の問題は、すべての価格は賃金、利潤および地代に分解するという

考えに関係するものである。スミスは、これら三つの構成部分への価格のその分解は究極的にのみ生じるのだと主張しているのではあるけれども（したがって、これら三つの要素とは別に他の諸要素も存在しうると考えてもよいということとなる）、時として彼は、あたかも価値は直接的に賃金、利潤および地代から成り立っているかのように論じている。すなわち、あたかも、その時々^①に支払われる賃金、利潤および地代が一財貨の価値を取り尽くしてしまうかのように、したがってまた、あらかじめ生産手段——その価値は当該財貨の価格の一部とならなければならない——の生産において支払われている賃金、利潤および地代といったものを考慮に入れる必要がないかのように、論じているのである。こういうことから、たとえば、スミスはつねに、国民生産物の年々の価値を、それと同一年度の間に賃金、利潤および地代の形で分配される諸所得の合計と考えているのである。Napoleoni [1970], p. 42.

(3) 本稿⁽¹⁾の注2を見よ。

(4) Napoleoni [1970], pp. 41-42.

(5) ナポレオーニは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「年々貯蓄されるものは、年々費消されるものと同じように規則的に消費され、またほぼ同じ時期に消費される。だがそれは異なる一群の人々によって消費されるのである。富裕な人の収入のうち彼が年々費消する部分は、たいていは、怠惰な客人や家事使用人によって消費されるのであって、この人たちは自分たちが消費するのと引き換えにあとにはなにものも残さない。ところが、富裕な人が年々貯蓄する部分は、利潤を獲得するためにただちに資本として用いられるのであるから、うたと同じようなやり方で、またうたとほぼ同じ時期に消費されはするが、異なった一群の人々、すなわち、労働者、製造工、手工業者によって消費されるのであって、この人たちは自分たちの年々の消費の価値を利潤とともに再生産するのである。この富裕な人の収入がこの富裕な人に貨幣で支払われると仮定しよう。もし彼がその全部を費消したならば、この全部で購買しえたであろう衣食住は、前者の一群の人々〔不生産的労働者〕のあいだに分配されたであろう。だがその一部が貯蓄されると、その部分は彼自身か他のだれかの手で、利潤を獲得するためにただちに資本として用いられることになるから、その部分で購買しうる衣食住は、必然的に後者の一群の人々〔生産的労働者〕のためにとっておかれる。消費そのものは同じであっても、消費者が違うのである。」(W. N., pp. 321-322. 大河内訳〔I〕, 529ページ。〔 〕内は中川。) Napoleoni [1970], pp. 43-44.

なお、ナポレオーニは、このようなスミスの考えにたいしてつぎのような指摘をくわえている。すなわち、すべての蓄積された資本は付加的な労働者たちの賃金ということに（したがってまた、付加的な労働者たちの消費ということ

に) 帰着させられるというこの考えは、スミスが時おり採用した価値は直接的に三つのタイプの所得から構成されるという趣旨の考えのなかに含意されている見地と類似した見地を、示しているのであり、蓄積された資本のうちの生産手段という価値構成要素は、それが一商品の価値の一構成部分に含まれていないのと同じように、無視されているのである。なお、(a)一財貨の総価値と、賃金と剰余の結合価値との、厳密な区別、(b) (a)のことから出てくることであるが、) 社会的産出の総価値と、その生産期間のあいだに分配される諸所得の価値との、厳密な区別、そして最後に、(c)総蓄積と、その総額のうちの賃金前払いからなる部分との、厳密な区別といったことは、マルクスにおいてはじめて見られるものである。Napoleoni [1970], p. 44.

また、ナポレオーニによれば、スミスは所得を生産物の価値と同一視しているがゆえに国民所得についての彼の概念規定は欠点のあるものであり、また、賃金前払いと資本形成との彼の同一視は満足のいくものではない、とされる。Napoleoni [1970], p. 58. 本稿(1)の注2も見よ。

なお、ホルランダー (S. Hollander) は、1973年の彼の著書、『アダム・スミスの経済学』第5章「分配の理論」のうちの「国民所得計算」という節において、たしかにスミスはいくつかの箇所で、個別企業による年間のすべての支払いは土地、労働および資本という諸要素に対してなされる諸支払いに還元されるという立場をとり、減価償却を独立の費用範疇として扱うという考えは退けられるということとなっており、さらに形のうえでは、スミスはそのような見方を国民所得にまで拡張してはいるが、国民勘定の問題そのものに関しては、『国富論』をつうじて固定資本の償却に大きな注意が払われているということからみて、減価償却を考慮にも入れた、賃金、地代および利潤からなる純国民所得を粗国民所得から区別するアプローチのほうが、スミスの熟慮のうえでの見解というものをよく反映しているかもしれないとしつつ、国民所得計算という視点からの、スミスの議論についての検討を行なっている。それについては、Samuel Hollander, *The Economics of Adam Smith* (Toronto: University of Toronto Press, 1973), pp. 144-147, 小林昇監修, 大野忠男, 岡田純一, 加藤一夫, 斎藤謹造, 杉山忠平訳『アダム・スミスの経済学』(東洋経済新報社, 1976年), 210-213, 250-251ページを見よ。

(6) Napoleoni [1970], pp. 43-44.

(7) Napoleoni [1970], pp. 44-46. なお、ナポレオーニは、それら二つの道すじのおのおのについてつぎのような説明を与えている。

まず、資本蓄積の増進による賃金率の上昇、労働者の生活水準の向上ということに関する説明はつぎのようなものである。すなわち、スミスによれば、賃金水準は、労働需要の絶対的な水準ではなく労働需要の変化率に依存する

(*W. N.*, pp. 68-74. 大河内訳〈I〉, 117-124ページ。), つまり, 労働需要の増加率が大きければ大きいほど諸賃金はヨリ高く, 他方, 労働需要のこの増加率は資本の蓄積に依存するのであるから, 諸賃金の水準は, 資本蓄積率に依存するということになるのである。そして, 諸賃金は社会の圧倒的大部分の所得を構成するのであるから, 賃金率あるいは労働の自然価格の上昇は, 社会的繁栄の一つの本質的な要素なのである。Napoleoni [1970], p. 45. [ナポレオーニは, つぎのようなスミスの文章を引用している。「それゆえ豊かな労働の報酬は, 富の増大の結果であるが, 同じくまた, 人口の増加の原因でもある。それについて不平を鳴らすのは, 最大の社会的繁栄の必然的な結果や原因について泣きごとをいうのと同じことである。」] (*W. N.*, p. 81. 大河内訳〈I〉, 138ページ。) Napoleoni [1970], p. 45. なお, ナポレオーニによれば, 蓄積が諸賃金にたいして及ぼすかもしれない二つのありうる効果を区別する必要があるのであるが, そしてスミスはつねにそれらの効果に区別立てをしていたわけではないけれども, スミスはそれら二つのありうる効果の双方を議論していたのであり, そしてその議論はつぎのようなものであった, とされる。第一のものは, 当時広く受け入れられていた見解を反映しつつスミスが自然的水準をこえての諸賃金の上昇は人口増加を刺激するであろうと主張した短い期間に関係するものであり, そしてこの人口増加による労働供給の増加は諸賃金を引き下げる効果をもち, それゆえ諸賃金は再びその自然率に一致することになる, といったものである。(*W. N.*, p. 80. 大河内訳〈I〉, 136ページ。) もう一つのありうる事態は, 賃金水準にたいする蓄積の効果は永続的なものであることができ, またそれゆえ労働の自然価格そのものが上昇させられる, といったものであり, そのことはつぎのスミスの文章のなかにも見られる。「一方の経費の使い方〔生産的労働の維持ということに帰着することとなる経費の使い方〕は, 他方の使い方〔不生産的労働の維持ということに帰着することとなる経費の使い方〕よりも, 一個人の富裕にとって有利であるように, それと同じことが一つの国民の富裕にとってもいえる。富裕な人の家屋, 家具, 衣服は, 下層階級や中流階級の人々にとって, ほどなく役に立つものになる。彼らは, 上流の人たちがそのようなものにあきてくると, それらのものを購入することができるのであり, こうした経費の使い方が財産家たちのあいだで普及するようになると, 人民全体の一般的な暮らし向きもまたこのようにして次第に改善されるのである。……かつてのシーモア家の館は, いまではバース街道に面した一軒の宿屋になっている。大ブリテンのジェームズ I 世の結婚用ベッドは, 主権者から主権者へ贈るのにふさわしい贈物として, 彼の王妃がデンマークから持参したものであるが, これが数年前には, ダンファームリンのある居酒屋の装飾品になっていた。」(*W. N.*, p. 330. 大河内訳〈I〉, 543-544ページ。[]内は

ナポレオーニ。) Napoleoni [1970], p. 45.]

つぎに、資本蓄積の増進による雇用の増大ということに関する説明はつぎのようなものである。すなわち、スミスはまた、蓄積が雇用の増加をもたらすという理由から、蓄積に賛成した。生産的労働の維持に向けられるファンドへの剰余の転換は、社会の年々の生産物の支配労働価値 (*labour commanded value*) を組織的に増大させることによって、ますます多くの人々がその雇用を見いだすことを、可能にするのであり、このようにして、貧困に陥った失業者の増加よりもむしろ、報酬を受ける労働者総数のいっそうの増大が存在するということになるのである。Napoleoni [1970], pp. 45-46.

そして、ナポレオーニによれば、以上のことは、「すべて浪費家は公共社会の敵であり、節約家はすべてその恩人であるように思われる」(*W. N.*, p. 324. 大河内訳くI), 533ページ。)というスミスの周知の判断の理由を説明している、とされる。Napoleoni [1970], p. 46.

- (8) Napoleoni [1970], p. 46. このことについてナポレオーニはつぎのような説明をなしている。すなわち、スミスの分析の意義を正しく理解するためには、その分析がかかわっていた歴史的背景を考慮に入れなければならない。スミスの時代の社会は、封建的な経済から資本主義的／ブルジョア的な経済へと変化しつつあった、そして、この変化において、資本主義的蓄積プロセスが重要な役割を演じたのであった。すなわち、封建主義的なタイプの経済組織は、その生産プロセスが貴族階級の消費欲求の充足に向けられているということから生じてくる一つの危機を経験しつつあった。つまり、そのような消費は時間の経過とともに大きなものになっていくかもしれないとしても、それでもなおその増大は限られた程度のものであるにちがいないのであり、したがってそこには、自然的に増加する人口のうちのますます多くの部分が雇用されないままに留まることになるという可能性が存在することとなる。スミスの用語で言えば、このことはつぎのように言うことができる。すなわち、封建的な社会に生じる剰余はほとんど全く不生産的労働者に支出されるゆえに、社会は停滞的なものであらざるをえない、そしてそれゆえ、雇用の増大や労働者の生活水準の向上といったことは、全く存在しないかあるいは無視しうる程度のものであるかのいずれかである、ということになるのである。かくして、スミスにとっては、蓄積ということをその本質的な属性としてもつ資本主義経済が、深刻な歴史的危機の解決にとって欠くことのできないものと、思われることとなったのである。スミスの名声は、彼の歴史意識および、資本主義的な組織化によって古い社会構造のうえにつくりだされた根本的な諸変化というものについての彼の認識ということのなかに、あるのであり、そして、新しい社会の分析において政治経済学がその現実的な洞察力をもって取り組むことのできるきわめて重

大な課題というものは、こういったことと結びつけて考えられるものなのであったのである。〔ナポレオーニは、つぎのようなスミスの文章を引用している。「政治経済学は、およそ政治家あるいは立法者たるもの行なうべき学の一部門としてみると、二つの異なった目的をもっている。その第一は、人民に豊かな収入もしくは生活資料を提供すること、もっと正確に言えば、人民にそうした収入や生活資料を自分で調達できるようにさせることである。第二に、国家すなわち公共体にたいして、公務の遂行に十分な収入を供給することである。政治経済学は、人民と主権者の双方をとともに富ませることをめざしているのである。〕(W. N., p. 397. 大河内訳〈Ⅱ〉, 75ページ。) Napoleoni [1970], p. 46.

C. ナポレオーニ (1970) についての覚書

ナポレオーニによれば、スミスは「支配される労働」を交換価値の真の尺度であるとするとともに他方でその「支配される労働」がどのように決定されるか、つまり、交換価値はどのように決定されるかということの問題にしているのであり、そしてこの後者の問題に対するスミスの議論は不首尾なものではあったが、彼の「支配される労働」という概念は資本主義的経済成長それ自体の認定および測定のための一つの規準を提供するものとして解釈することができ、またその意味で価値についてのスミスの議論は経済思想史上における一つのきわめて重大な段階を構成するものであった、とされるのであった。また、ナポレオーニによれば、スミスのいう「支配される労働」というものをこのようなものとして解釈することがスミスの議論に即していることになるのであって、社会的産出高とその産出高が支配しうる労働量との間の関係を一つの交換関係として考えていたスミスは、経済の達成度を測る一つの規準としてのこの交換関係の重要性ということのゆえに、さまざまな財貨の間の個々の交換比率ということに関連する交換関係にたいするよりもこの交換関係にはるかに大きな意義を付していた、とみられるのであった。

そしてナポレオーニはそのようなものとしてのスミスの議論の特徴、問題点を指摘しつつ、スミスが展開している議論によれば、「支配される労働

働」という尺度は、たんに一財貨の価値を測定するだけでなくその価値のうちの剰余に当たる部分を測定するものとしても使用されうることによって、みずからの生存手段に加えてある価値（利潤および地代の形で占有される剰余）を生産するものとしての「生産的労働」という概念とあいまって、その当該財貨が（生産的労働の）雇用の増加をつうじて一般的な生産物の増加にたいしてなしうる潜在的貢献の度合いをも測定しうることとなり、そしてさらにこのスミスの議論においては、社会的産出高にはそれに対応する支配される労働が対置され、その支配される労働と体化された労働との差が、その社会の剰余に対応するとともにその経済システムに新たにもたらされる潜在的な付加的労働の量を示し、そしてその剰余が資本として蓄積、使用されるときにはそれは現実の付加的な生産的労働への賃金支払い、（生産的労働の）雇用の増加として現れ、そしてそのことが社会的産出高の現実のいっそうの増大をもたらすということになっている、とみるのであった。

なお、ナポレオンによれば、スミスが経済プロセスの成功の程度そのものを考えるさいには、少なくとも二つの異なる道すじで、すなわち、資本蓄積の増進による賃金率の上昇、労働者の生活水準の向上という道すじ、そして、資本蓄積の増進による雇用の増大という道すじで考えている、とされるとともに、このようなスミスの分析の意義を正しく理解するためには、その分析がかかわっていた歴史的背景を、すなわち、資本主義的蓄積プロセスが重要な役割を演じた封建的な経済から資本主義的／ブルジョア的な経済への変化といったスミスの時代の社会という歴史的な背景を、考慮に入れなければならない、とされるのであった。

(2) H.W. スピーゲル (1971)⁽¹⁾

スピーゲルは、スミスは分業→交換→商業的社會→交換手段としての貨幣へと議論をすすめたのち交換価値についての議論へとすすみ、使用価値と交換価値との価値のパラドックスに言及したのち直ちに交換価値の研究

へ向かった、とし、⁽²⁾そして、スミスの交換価値についての議論に関連してつぎのような見解を示している。

① スミスは、一方で、財貨の交換価値はその財貨が市場において支配することのできる労働量によって決定される (determined) という意味での労働価値説を展開している。⁽³⁾なお、スミスの議論には、支配される労働という観点からのこの価値学説と並んで、労働苦痛という観点からの一価値学説である一つの「実質費用」価値説 (a “real-cost” theory of value) が出現しているのであるが、この価値学説から、前者の価値学説が導き出されているように思える。すなわち、財貨の所有者はそれらの財貨を交換することによって、彼が交換において獲得するものを生産するためにみずから働くという苦痛を回避することができるがゆえに、それらの財貨は、交換においてそれらの財貨が支配する労働という価値をもつ、⁽⁴⁾というのである。⁽⁵⁾

② したがって、すべての交換可能な商品の「真実」 (“real”) 価値あるいは「自然」価値は、支配される労働という観点から測定される (measured) のである。しかしながら、異なるタイプの労働には異なる程度の辛さや創意が伴うため、労働は一つの等質的な量たりえない。それゆえ労働とは正確に測定することはできないものであり、したがって労働は、財貨の価値を一般的に評価する公分母として役立ちえないということになるのであるが、その代わりに、〔労働のそのような相違という問題については、〕「正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって」 (W. N., p. 31. 大河内訳〈I〉, 55ページ。) 調整が行なわれるのである。このように、市場価格は支配される労働によって説明され、そして、支配される労働が市場価格によって説明されるのであり、これは、スミスの思想の解釈者たちが循環論として批判してきたある種の論法の一例を示すものである。⁽⁶⁾

③ 貨幣の介在が、財貨の価値の評価ということを、労働という規準からさらに遠ざけてしまう。費やされる労働 (labor expended) という観点

からは等量の労働はつねに同一の価値あるいは同一の「真実価格」(“real price”)をもつ、しかし、貨幣の価値は変動にさらされるのであり、そして貨幣のタームでの、労働の「名目価格」および諸商品の「名目価格」も、変動にさらされるのである。このように、諸商品と同様に労働も、真実価格と名目価格をもつのである。⁽⁷⁾

④ なお、スミスによる労働価値説の展開においては、労働は、ときとして支配される労働として解され、また他のときには、費やされる労働あるいは労働費用 (labor cost) として解されている。これにくわえて、社会が進歩するにつれていっそうの複雑化が存在することになる。というのは、スミスは、そのばあいには労働が価値の唯一の決定因ではなくなるということ、そして、労働、土地および資本の助けをもって生産される財貨の価格は、労働に対する収入だけでなく資本や土地に対する収入をも含むということ、を認めるからである。スミスは、資本の蓄積と土地の占有にさきだちしたがってまた労働の生産物がすべて労働者に属する初期末開の社会状態では費やされる労働が財貨の価値を決定するが、資本が生産プロセスにおいて使用されるようになりまた土地が私有財産になると財貨の価格は賃金、利潤および地代に分解する、とするのである。かくしてスミスの労働価値説は、一つの生産費説へと変ずることとなるのである。⁽⁸⁾

(注)

- (1) ここでは、Henry William Spiegel, *The Growth of Economic Thought* (Durham, North Carolina: Duke University Press, 1971)——以下、Spiegel [1971] と略記する——のなかで示されているスピーゲルの所論をみる。
- (2) Spiegel [1971], p. 248.
- (3) このことを示すものとしてスピーゲルはスミスのつぎのような文章を引用している。「人が富んだり貧しかったりするのは、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。だが、分業がひとたび徹底的に行き渡るようになったあとは、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さい部分にすぎない。彼は、その圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならないのであって、彼は、自分が支配できるその労働の量、ま

たは自分が購買することのできるその労働の量におうじて、富んでいたり貧しかったりするにちがいない。したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとせず他の商品と交換しようと思っ
ている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52ページ。) Spiegel [1971], p. 248.

- (4) スミスがこのような考えを表しているものとして、スピーゲルは、本稿(2)の注3でみた『国富論』の文章の直後に続くつぎのような文章を引用している。「あらゆる物の真実価格、すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得した人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値うちがあるかといえば、それによって彼自身のはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することができる労苦と骨折りである。貨幣または財貨で買われるものは、われわれが自分の肉体の労苦によって獲得するものとまったく同じように、労働によって購買されるのである。その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、この労苦をわれわれからはぶいてくれる。それらはある一定量の労働の価値をふくんでおり、その一定量の労働の価値をわれわれは、そのときそれと等しい労働量の価値をふくんでいるとみなされるものと交換するのである。労働こそは、すべての物にたいして支払われた最初の代価、本来の購買貨幣であった。」(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。) Spiegel [1971], pp. 248-249.

(5) Spiegel [1971], pp. 248-249.

(6) Spiegel [1971], p. 249.

(7) Spiegel [1971], p. 249.

- (8) Spiegel [1971], pp. 249-250. なお、スピーゲルによれば、このスミスの議論のなかには、ときとして土地と資本は労働と調和的に機能させられる生産要素としてあらわされるとともに他のときには土地や資本への収入が労働の生産物からの控除分としてあらわされるという相反する二つの考え方の併存 (ambivalence) といったことが含まれていた、とされる。Spiegel [1971], p. 250.

なお、スピーゲルは、以上でみてきた彼の見解を、彼の著書の第11章のなかの「労働価値説」(THE LABOR THEORY OF VALUE) という表題の付された節のなかで示している。スピーゲルは、どちらかといえばスミスの議論における「価値の決定の問題」と「価値の測定の問題」といったことは問題にすることなく、以上でみてきたようなものとしての労働の観点からの交換価値についてのスミスの議論を、スミスの「労働価値説」としている、といえる。

なお、スピーゲルは以上の議論につづけて、「自然価格」(**THE NATURAL PRICE**)という表題のもとに、さらに、「自然価格」、「市場価格」に関するスミスの議論を取り扱おうとしている。それについては、Spiegel [1971], p. 250 を見よ。

H.W.スピーゲル(1971)についての覚書

スピーゲルは、スミスの議論における「価値の決定の問題」と「価値の測定の問題」といったことはことさら問題にすることなしに、交換価値についてのスミスの議論を取り扱うのであった。

そして、スピーゲルによればまず、スミスは彼の議論の一方において、同じく彼の議論に存在する一つの「実質費用」価値説(労働苦痛という観点からの一価値学説)といえるものから導き出されているように思えるところの、「支配される労働」という観点からの価値学説としての労働価値説を展開し、すべての交換可能な商品の「真実」価値は「支配される労働」という観点から決定・測定されるとしている、とされるのであった。ただし、スピーゲルによれば、さまざまな労働のあいだには質的な相違があるために労働の量を正確に測定することは不可能であるという点で労働は価値の評価のための一般的公分母たりえないという問題があるのであるが、この問題にたいしてスミスは「市場のかけひきや交渉」による調整ということを持ち出している、だがそれは、市場価格を「支配される労働」によって説明しそしてその「支配される労働」を市場価格によって説明するといった循環論である、とされるのであった。さらにまたスピーゲルは、スミスの議論では労働による財貨の価値の評価といったことは貨幣の介在ということによってさらに後退させられることとなっている、とみるのであった。

なお、スピーゲルによれば、スミスの議論では交換価値を説明するものとしての労働はときとして「支配される労働」という意味あいを持たせられているとともに他のときには「費やされる労働」あるいは「労働費用」

という意味あいを持たせられている、とされるのであるが、スピーゲルはこのように、「費やされる労働」という用語と「労働費用」という用語を同義のものとして使用し、そして、「費やされる労働」あるいは「労働費用」の観点からの交換価値についてのスミスの議論も「スミスの労働価値説」ということによって意味されることの一つである、ととらえるのであった。そしてまたスピーゲルによれば、そのような労働価値説についてもスミスは、それは資本の蓄積と土地の占有の行なわれる以前の社会状態には適用しうるがそれらが行なわれる社会状態には適用しえなくなると考えたのであり、そしてそのような社会状態についてはスミスは賃金と利潤と地代という観点から交換価値を説明しようとしたのであって、スミスの「労働価値説」は一つの「生産費説」へと変ずることとなっている、とされるのであった。ただし、スピーゲルによれば、スミスはそのようなことを扱う議論のなかで、一方で土地および資本を労働と結合して生産を編成する労働とならぶ生産要素として取り扱うとともに他方で土地や資本にたいする収入を労働の生産物からの控除分として取り扱うといった相反する二つの考え方を併存させてはいる、とされるのであった。